

研究ノート

越境する先住民族文化

東京開催の台湾文化祭における台湾原住民族文化紹介の事例から

猿 橋 順 子*

1. はじめに

本論で紹介する事例に登場するエリ・リャオさん（以下、エリさんとする）は、台湾の原住民族¹⁾のルーツを表明しながら東京を拠点に音楽活動を行う歌手である。歌手は身体化された技芸を実演（パフォーマンス）するわけだが、そこには有形の文化産品も伴う。楽器や衣装、舞台装置などはその主だったもので、アルバムのジャケットやライブのチラシ、公式HPやSNS等にもしばしば民族の意匠があらわれる。

イベントやフェスティバル、公演では、そうした有形・無形の文化活動が、その発祥地である国や地域を離れて披露される。とりわけ異国での紹介のしかたは、開催地の人びとの当該文化の理解や解釈のしかた、享受や消費のしかたに影響を与えるし、聴衆の知識や期待が、演者の紹介のしかたを左右する（猿橋2021）。そうした相互作用のなかに異国での文化実践と異文化の受容、相互理解があるといえよう。

文化活動、人びとの移動、これらの土地との関連という三項は、グローバル

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 台湾の先住民は1994年に「原住民族」と、1997年に「原住民族」と憲法に記され、現在、16の民族が台湾政府に認定されている。本稿では、台湾の少数民族先住民族を指す場合は調査参加者の表現に倣い「原住民族」と、広く一般論を論じる際には「先住民族」と表記する。

化社会において複雑かつ繊細な様相を呈している。先住民族も移民も主流派社会に対しては等しくマイノリティという存在である。他方で、先住民族は、それぞれの居住地で連綿と蓄積された生活文化をまもり、次世代に継承していく上で、土地との関連付けが重要となる。しかし、実際には先住民族の多くがさまざまな理由で国内移住や国外移住をしている。こうした事情が、同じマイノリティであっても移民と先住民族の連帯を難しくさせたり、同じ先住民族であってもその土地に暮らし続けるものと移住者（とくに都市移住者）との連帯を難しくさせることがある。

グローバル化は環境問題への取り組みや貧困と格差の是正など、全人類に関連する課題を共有することを促す。二期にわたる「世界の先住民の国際の10年」(1995-2004, 2005-2014)、国連総会における「先住民族の権利に関する宣言」の採択(2007年)や、世界先住民会議の開催は5000以上²⁾の先住民族どうしが出会い、つながる機会を提供してきた。

同時に、こうした国際会議で先住民族が出会うことを可能にするのは、まさに「移動」によってである。コロナ禍(2020年～2022年現在)により国際会議等もオンラインで開催されることが多くなったが、そうした動きは翻って、たとえば先住民族が先祖代々の土地に住み続けていたとしても、常にインターネットを介して諸外国の文化(たとえば西洋文化)に浸っているという状況は考えられるわけで、となると単にその土地に物理的に暮らしているかどうかは文化への帰属意識や世代間継承などとイコールに考えられないことはたやすく想像できよう。

だから、先住民族や移民を含め、社会的なマイノリティのエンパワメントや地位向上、ノーマライゼーション等については、彼/彼女らの物理的な移動だけではなく、デジタル空間を含め、各人がどこで、何を介して誰と出会い、どう関わり合い、そうした経験を経てどこへ向かったのか、その軌跡を通して理解することが大切になる。そして、こうした課題をめぐってパフォーマンスア

2) これらの機会に集う先住民族の多くが国家による分類や認定に基づいた単位、呼称を用いており、必ずしも当事者の認識に合致しているとは限らないことを付記しておく。

ーツを事例とした研究が蓄積されつつあることは、マイノリティ文化の活力や顕在性、公認などが舞踊や音楽などの芸能に代表されて実践されているからに他ならない (Kondo 2014, Koo 2021, Rogers 2015)。同時に、そこにはステレオタイプの固定化、文化消費や文化盗用などをめぐる批判や省察があることも忘れてはならない (Howard 2020, Young 2008)。

このような問題意識を念頭におきながら、本論では、2022年4月に東京のイベントスペースで開催された、台湾をメインテーマとした文化祭「Festoon」(花綵 (はなづな) の意) を事例に、台湾の原住民族文化がどのような経緯を経て会場に持ち込まれたのか、その際に人びとの関係性はどのようなものであったのか、主催者の思いはどのようなものであったのか、について、準備段階から当日にかけての実地調査と、終了後の主催者へのインタビューから見ていくこととする。

2. 事例および調査の概要

本節では、まず事例とする台湾文化祭の主催者であるエリさんの来歴について簡潔に紹介する。続いて、本論で注目する文化イベント「Festoon」の概要を示す。イベントは台湾をメインテーマとしながらアイヌ、宮古(沖縄)のミュージシャンのコラボレーションライブを目玉に、エリさんのルーツであるタイヤル族を中心とした台湾原住民族の文化コンテンツを多く含むように企画された。2.3では、筆者が当該イベントおよびエリさんをはじめとする関係者らとどのように関わったのか、調査概要を示す。

2.1 エリさんの来歴

エリさんは台湾原住民(タイヤル)の母、日本人の父をもつ40代(インタビュー時)の女性である。母(1953年生まれ)はタイヤル名をイプイという。現在、台北在住の母はタイヤルのなかでも「言語的に異質」とされる四季村の出身で、今も四季村に暮らす親戚がいる。エリさんは台北生まれであるが、幼い頃から祖母が暮らす四季村を訪ねるのが好きだった。祖母(1927年生まれ)は日本が台湾を植民地支配していた時代、医療従事者(看護師および助産師)

として自身の暮らす村落および周辺地域の村民の健康と衛生管理に尽力し、とりわけ女性の出産介助に携わった³⁾。日本人医師と共に働き、職業上の必要から日本語を流暢に話したという。だから、娘（イプイさん）の結婚当初は、娘以上に婿と日本語での会話が円滑だったようだ。

エリさんは幼少期を台北で母と暮らした。父は仕事で日本と台湾を行ったり来たりする生活だった。小学校2年生から東京で家族3人の暮らしが始まる。東京で大学、大学院に進学し、ニューヨークの大学院に編入する。大学院進学を志す頃から、出自である台湾原住民族の歴史や文化、精神世界を追求し始める。他方で、学問の道に向かおうとすればするほど、母との関係が困難になる一面もあったという。進むべき道を模索しているとき、母から「あなたの言うことがママにはひとつも分からない」と言われたことは、深く鋭くエリさんの胸に突き刺さった記憶として残っている。

ニューヨークの大学院で学んでいるとき、さまざまな出会いを経て、音楽（ジャズ）の道にいざなわれる。亡き祖母の「歌いなさい、踊りなさい」ということばが背中を押してくれたという。それ以来、祖母が好きだった歌、台湾原住民族の歌、家族や故郷の思い出を題材に作った歌、出会った人に勧められて知った歌など、台湾原住民族の音楽を中心に、されどジャンルや言語に固執することなく多ジャンルの楽曲を多言語で歌い続けて今日にいたる。

最近になって、母から「エリはおばあちゃんが喜ぶ職業に就いたね」と言われ、はっとしたという。先述の一件以来、母との間にはしこりがあると思っていた自分に気づいた。「母は自分が理解できる職業に娘が就いていることが嬉しい、というか安心なんじゃないかな」とエリさんは話す。若い頃は思いが至らなかったが、年齢の離れた日本人男性と結婚した台湾原住民族の母が被ってきた社会経済的な抑圧やジェンダー抑圧が想像され、胸が疼くこともある。

今回の台湾文化祭では、アイヌと宮古のミュージシャン達との共演が実現し

3) 日本は1895年から1945年まで台湾を植民地支配していた。中村(2018)は帝国日本の植民暴力についてタイヤルの人びとに聞き取り調査を実施し、植民地責任、脱植民、和解への道を考察している。エリさんも小さい頃、祖母から日本の植民地支配期の話をよく聞いたそうである。

たことをきっかけに、徐々に台湾原住民族文化の紹介に比重が置かれるようになった。それにより、台湾に暮らす母にいろいろな面で協力してもらった。フードメニューのレシピ、調理のアドバイス、食材や雑貨の調達などである。これまでも音楽活動を応援してくれている母であったが具体的な出番があり「そわそわと楽しそうにしていた」そうだ。3節以下では、エリさんの母、イプイさんと彼女を取り巻くタイヤルの人びとの関与にも触れていく。

2. 2 台湾文化祭「Festoon」の概要

台湾文化祭は、2022年4月9日・10日の2日間、渋谷区にある二階建てのイベントスペースで開催された。タイヤルの代表的な家庭料理 Tmmyan (タムミャン⁴⁾) を含む「タイヤル定食」の提供と台湾に関連する書籍、植物、菓子類の販売、台湾をモチーフにしたイラスト動画の投影が1階で、台湾・宮古・アイヌ音楽のコラボレーションライブ、台湾ビールを目玉とするバー、台湾原住民の織物の展示、それに関連するトークショーが2階で実施された(以下のチラシ参照)。

エリ・リャオ(うた・作詞)・アールゴン(ギター)・広島
featuring 油村真穂(野・ワックス+高橋)

4/9
Open 19:00 / Start 19:30
前売: 3,500円 / 当日: 4,000円

4/10
Open 15:00 / Start 15:30
前売: 4,000円 / 当日: 4,500円
バンド: アート
OKI family Trio
DJ: Ryohei Kato (DJ) / 18+ (未成年)

FOOD 1F
フードユニット Tropical
4/9土 16-19時
4/10日 12-15時
タイヤル定食(各日20席)
1,500円(要予約)

LIVE FESTOON 2022

4/9-10 2F「スナック 菓」
台湾産、
スイーツ、
がけドリンク等

MARKET (1F)
4/9-10 植物種/月経用、
12-19時 台湾菓子
台湾関連書籍など

AFTERNOON TALK
「台湾原住民族の工芸を鑑賞」
4/9(土) 15:00-18:00
Open 15:00 / Start 15:30
出演: 石丸真由 (東京工科大学)
料: 1,300円

台湾・宮古島・北海道編

エリ・リャオと仲間たちが贈る
春の花線列島文化祭

LIVE: hako@ai.wakwak.com 090-3248-9692
予約・問合せ
TALK: kazzugano@yahoo.co.jp (県とアクセス 資料)
FOOD: worldstable@gmail.com (Tropical)

hako gallery
ハコギャラリー

4) カタカナ表記はエリさんにもっとも近い文字をあててもらった。本稿ではタイヤルの人びとが用いるローマ字表記で記す。

ライブ出演者は以下のとおりである。

エリ・リャオ（うた）・ファルコン（ギター）

池村真理野（サクソ）

OKI family Trio (Oki, Reppo, Manaw)

文化祭に関与した主だった人びとを以下の表1にまとめた。エリさんに「文化祭開催の経緯」を改めて説明してもらった際の出現順に匿名で掲載している。チラシ作成を手がけたJさんのみ、遠隔地に居住しており会場には来ていない。また、先述のとおり、台湾に暮らすエリさんの母、イプイさんも会場参加はしていないが、レシピの提供、調理のアドバイス、食材や物品の調達と重要な役割を担った。表1の14名のうち、台湾のルーツをもつ人はIさんのみである。

表1：イベント関係者

	職業	イベントでの主な役割
Aさん	イラストレーター	台湾のイラスト動画提供
Bさん	イベントスペースオーナー	会場、ライブチケット販売
Cさん	イベントスペース管理	会場、ライブチケット販売、受付
Dさん	エディター	台湾織物の展示会、トークショー企画
Eさん	会社員（メディア）	台湾料理「 Тайヤル定食」の調理と提供
Fさん	会社員（教育）	台湾料理「 Тайヤル定食」の調理と提供
Gさん	アーティストマネージャー	ライブ運営
Hさん	アートイベント運営	イベント全体の統括
Iさん	会社員（メディア）	台湾風バー「スナック華」の出店
Jさん	チラシデザイナー	チラシ作成
Kさん	音響	ライブの音響
Lさん	映像制作	イベント全体の記録・撮影
Mさん	園芸家	台湾関連植物の販売
Nさん	会社員（出版）	台湾関連書籍の販売

文化祭企画は、2022年2月、Bさんからエリさんへの声かけから始まった。Bさんと知り合ったきっかけは、かつてエリさんがアルバムのジャケット制作を依頼したAさんの紹介である。新型コロナウイルス感染症の流行により、

2020年から2021年にかけて、多くの音楽や演劇など、パフォーマンスアーツの公演が中止、もしくは縮小されていた。エリさんも活動中断を余儀なくされていたが、徐々に音楽活動を再開しているのをSNSで見たBさんが「台湾をテーマにライブイベントやらないか」と声をかけた。この会場で出演歴が豊富なアイヌ音楽のミュージシャン、OKIがソロライブを予定していたことから、それに近い日程でコラボレーションライブの可能性が検討された。Eさんの発案と紹介で沖縄県宮古島出身のサクソ奏者の池村真理野も加わることになった。2月末に開催された第1回の打ち合わせから、当日まで1ヶ月半弱ときわめて短い準備期間だった。

Bさんから「OKIさんとやるからには（タイヤルの）口琴を入れてください」というリクエストをもらった。OKIさんはトンコリ（弦楽器）奏者として著名だが、アイヌ民族が伝承するムックリ（口琴）も大切に演奏している。「音的に合うはず」と思い快諾した。他方、沖縄の音楽にはある程度馴染みがあると思っていたが、宮古の音楽は今までエリさんが出会ってきたどの琉球音楽とも違っていった。真理野さんに宮古民謡の「お勧めCD」を送ってもらったが、ことばがまったく分からない。アイヌ音楽と宮古とタイヤル、原住民音楽を中心にしながら台湾をどうつなげるか、創造力を求められる課題となった。

ご縁がつながって文化祭を開催することになった旨をAさんに伝えると、台湾のイラストで制作した動画を「よかったら使って」と提供してくれた。1階の入り口近くの壁に投影し、原画も飾り「台湾の雰囲気を出し出す」助けになったという。このように人づてで企画が始動し、アイディアやモノ、人びとがぞくぞくと集まった。

2. 3 調査の概要

筆者は、エリさんにかつて調査協力をしていただいたご縁から親交が続いていた。2022年3月に再会したとき、このイベントの企画と準備状況を聞き、研究者かつボランティアという立場で参加させていただくことを依頼した。エリさんの長年の友人で、母親が台湾人のIさんが運営するバー「スナック華」

(ライブエリアに併設)の手伝いをするようになった。表2に参与観察を含んだ調査概要を示す。

表2：調査概要

2022年／月日	参加および調査の概要
3月11日	エリさんと面談、イベント企画、準備状況について聞く
4月7日	エリさん、Hさん、Iさん、ボランティアとしての事前打ち合わせ
4月9日	イベント1日目 ボランティアとして参加
4月10日	イベント2日目 客として参加
7月8日	エリさんにライフストーリー・インタビューを実施

上記に加え、電子メールやSNSでやりとりを行い、公式HP上でのイベント告知などにも目を通した。イベント終了から3ヶ月を経た7月8日に、改めてイベントについて振り返るライフストーリー・インタビューを実施した。インタビュー時間は4時間である。

ライフストーリー・インタビューは過去の経験について比較的自由に語るインタビュー法のひとつである (Atkinson 1998)。経験の語りはインタビュアとの対話によって紡ぎ出されるとする対話構築主義に立脚する手法で、語り手の意味世界を言語化することをインタビュアが積極的に促すことにより、語り手は自身の体験について整理ができたり、その経験の自分自身にとっての意味や今後の展望が見出されたりする点が特徴である (桜井・小林 2005)。語りの共同構築はインタビューを受ける側とする側、双方にとってエンパワメントにつながる可能性が指摘されている (朴 2014, Saruhashi 2018)。

なお、調査の実施にあたっては青山学院大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得た「多言語社会日本の言語コミュニケーション管理に関する調査」の一部として、口頭および書面で研究の趣旨を説明した上で、「調査参加への同意書」を二通作成し交わした。本稿は草稿の段階でエリさんにご確認いただき、補足説明を受けた上で必要な修正を施した。その際、エリさんと協議した上で実名掲載としている。

3. 台湾文化祭「Festoon」をめぐる語り

本事例は東京の都心に2日間だけ異文化空間を形成した実践であるといえる。およそ間口3.5m、奥行き15mの2フロアに台湾をメインテーマに、台湾原住民（とりわけエリさんのルーツであるタイヤル族）の有形・無形のモノ・コトが記号資源、談話資源⁵⁾として相互に関連づけられて持ち込まれる。あるいは持ち込まれることによって関連づけが生まれる。それはどのようになされるのか。本論は、こうした問いについて主催者であり主演者であるエリさんの語りから接近しようと試みるものである。その解釈は筆者が調査者として準備から本番までの時間や場を共にし、人びとの様子を見たり、話を聞いたりした上での考察であることを付記しておく。

Festoonには、第2節で概観したように、多くの人びとが関わり、さまざまな文化コンテンツが寄せ集められた。エリさんは、ライブ企画と同時に他のさまざまな文化コンテンツの準備と調整を進めていた。コンセプト、イベントタイトル、チラシ作成と告知、決めなくてはならないことが山ほどあり「肝心のライブをどうしよう」と思いながら同時進行で準備を進めていく。

時に発想の転換も求められる。ひとつの決断が、柔軟な対応にも妥協の産物にも思えてくる。妥協の産物だと思っていたものが時を経て正解に見え始めることもある。そうしたたくさんの複雑に相互作用する行為群のなかから、本稿ではタイヤルの家庭料理である Tmmyan を出すことになった経緯と過程、音楽ライブのコラボレーションが実現する過程を考察する。多くの文化コンテンツが持ち込まれたなかで、当該事例に注目する理由は、両事例がエリさんの生い立ちに深く関わっていること、料理については当日までの試行錯誤に日本人

5) 石原(2022)は先住民をはじめとするマイノリティが固定化した文化表象をもって記号化されることによる弊害を論じ、それを解体する方略を「対話を続けること」に見出している。筆者は石原の問題意識に共感しつつ、固定化された記号とそれを解体する対話を辨別せず、そのすべてを記号と談話の相互作用的な連環として動的に捉えることを重視する立場を取る。筆者は対話も記号論的なテキスト間の相互関連として捉えており、両者は切り離すべきではない(切り離しえない)と考えている。固定化された記号を解体する方略を模索、探究しているという意味では石原(2022)と同じ目的意識を持っていると認識している。

とタイヤル族の人びとの広範な関わりが確認されたこと、音楽についてはエリさんの本業であり、メインイベントであることによる。

3. 1 タイヤル家庭料理 Tmmyan の提供

フードユニットの調理は代々木公園などで開催される大規模な国フェスで飲食ブースの出店経験がある Eさんと Fさんが担当することになった。台湾関連のイベントで馴染みの「フェス飯」と言えば魯肉飯やタピオカだが、エリさんには「長年の誰にも言っていない野望」があったのだと言う。肉をアワ（小米）と共に塩漬け発酵させた熟成肉で作るタイヤルの家庭料理 Tmmyan を提供するに至った経緯は以下のように語られた。

【抜粋 1：Tmmyan】⁶⁾

E：実は長年の誰にも言っていない野望、((Fさんが制作したメニューを指さしながら))この肉、これは日本人絶対美味しいと思うと思うし、まず日本の台湾レストランでこれを出しているのを見たことがない、タイヤル族のザ・ソウルフードの肉。ここぞという時に出したかった。

(2月26日に行われた)最初の顔合わせの打ち合わせの後、イベントタイトルを決めがてら Eさんと Fさんとご飯食べてたときに話したら、あの二人も台湾何度も行ってて詳しいんだけど、それ知らない、食べたことない、と興味を示して。

*：台湾の夜市で出る？

E：夜市なんかには出ませんよお。タイヤル族の家庭料理、タイヤルの家庭に育った人で知らない人はいない、この味。だから台湾人も知らないと思う98%。レストランにもほとんど出さない。これは家で作って食べるもの。

6) インタビュー抜粋部の*は筆者の発話、Eはエリさんの発話、筆者による意味の補足は()で、動作などの非言語情報は(())で示す。中略はエピソード単位での省略は(中略)とし、一連の発話の中の割愛は……と示す。筆者の考察部の「」は逐語録からの引用である。

*：エリさんのお母さんも？

E：ああ、もう脈々と。

*：(家族で)日本に来てからも？

E：作る作る。

*：お母さんだけが作る？それともエリさんも教わって作る？

E：教わる。美味いから。

*：いつ教わりました？

E：(母が台湾に帰って)母と暮らさなくなってますね、食べたいからあれどうやって作るの？作り方教えてって。25歳ぐらい。

*：日本にあるもので作れる？

E：アワと塩と豚肉。肉は本当はなんでもいいんです。狩りで捕ったもの。魚もいい。豚はそのへんで買えて味がいいので。

*：台湾ではなんと呼ぶ？

E：Tmmyan。それがタイヤル語です。Tmmyan、Tmmyan といいます。
(中略)

*：いつぐらいから紹介したいと思い始めたんですか？

E：(母から作り方を)教わり始めた頃はただの大学生。普通に食べていて、あの時(文化祭の時)は凝った様子で出てきたんですけど、ふだんはスープでキャベツでも白菜でもなんでもいいんだけど菜っ葉とこのプチプチ(アワ)がついている肉が浮いているだけの。紹介したいと思ったり、したくない気持ちもあったり。それから、私が原住民とかマイノリティの文化にそれなりに成熟しないと紹介もできないというものあって。だけどいつぐらいからかなあ。原住民の歌を歌うようになって、そのことについて納得がいくぐらいになってからかな。

Tmmyan はタイヤルの家庭では一般的な料理で、エリさんも子どもの頃から母の作る Tmmyan の味を身近に育った。エリさんの母イブイさんの Tmmyan は、地域でも評判の腕前だったそうだが、【抜粋 1】では、国外に移住しても受け

継がれる「家庭の日常の味」、「お母さんの手料理」という面が強調されている。レストランや屋台に出る料理ではなく、「98%の台湾人は知らない」というときの「98」という数字には、台湾の原住民族人口の構成比率が2%であることを含意している。

母が台湾に帰ってからはエリさんも教わって作るようになり、家に遊びに来た日本人の友人に食べさせたことは何度かあるそうだ。家庭内や近しい友人との関係のなかで慣れ親しんでいた料理を、不特定多数の日本人に「ここぞという時に出したい」という「野望」を抱くようになったのは、台湾原住民の歌を人前で歌うことについて納得がいくようになったことに連動していると振り返った。

実際の Tmmyan の仕込み過程はどうだったのか。エリさんは、まず母に SNS を介してレシピを聞くところから取りかかった。やがて予想外の人とのつながりが生まれ、情報が行き交うことになる。【抜粋 1】にも、実際にはエリさんが馴染んできた Tmmyan とは異なるものになったことが、「凝った様子で出てきた」と表現されている。Festoon に向けて Tmmyan が『『ホンモノを出す』じゃない方向』に展開していった過程を【抜粋 2】に見てみたい。

【抜粋 2：日本人による Tmmyan 試作とタイヤルの人たちの反響】

E：レシピを母に聞いたんですけど、主婦は何グラムとかで作らないから、ママに何回聞いても「なめてみて」って、((ややいらついた口調で))
「でもこの豚肉は生だから生の肉を日本人はあんまりなめたくないと思うよっ」って言っても「うーん、ペロッとぐらいでいいから」とか言われて(笑)

*：(話が) 成立しない(笑)

E：(笑) 成立しなくてじゃあもういいや。試作が始まっても漬けてから食べるまでに1週間ぐらいかかるからたいして試作ができなくて。

*：そうだよねぇ。

E：しかもそれを私が食べに行くというタイミングもなく、Eさん達は食べ

たことがない、私が作ったものも食べたことがない、現地のものも食べたことがない、正解を知らない。そのうち「これは私たちの『妄想タイヤル料理』では？」みたいになって、「でもそれ、めっちゃいいじゃん、妄想タイヤル料理、めっちゃ食べてみたい」とかなって。そこからかなあ、「ホンモノを出す」じゃない方向にも考えが走り始めた。でもすごいんですよ。試作を重ねて、Fさんは中国語も読めないのに詳細に分析した研究報告みないなのをネットでゲットしてきて、Google 翻訳を駆使して。それで漬けた肉の画像をイベント告知の SNS にあげてたんですね。(母のレシピに基づく) Eさんの試作品の画像を見た私の親戚が(母に)「これはちょっとアワが多い」とか「塩が足りない感じがするよ」って、うちの母に「これエリが作ってるの？」って、母が「いや、エリはこんな風に作らない。これはたぶん日本人だよ」と。私に連絡が来て「これ私じゃないよ」、「ほらね、やっぱり」と。「目分量で伝えるとそういうことになるんだよ」とか。で、Fさんがその研究ノートみたいなのに基づいて作った方の画像には、会ったこともない原住民から拍手のスタンプが送られてきたって。やっぱり美味しそうかどうかで見ただけで分かるんですよ。……それから、これは「タイヤル族の伝統食」っていうわけにいかないからロールキャベツにしておもうって。私にはそういう発想はない。ロールキャベツなんて面倒くさすぎる。だからこれは彼らの立派な創作。私の村は特にキャベツの産地なんですよ。後から売る用に入ってきた作物ですけどね。これ((メニューを指さしながら)、ほら、「エリさんの故郷、台湾宜蘭郡四季村は標高は富士山クラス、キャベツ畑が広がる風光明媚なところですよ」とか書いてくれてる。

Tmmyan 料理班がエリさんと頻繁に会ったり、行き来ができないのは、時間的な制約もあるがコロナ禍であることも影響している。得られた情報を頼りに、未知なる Tmmyan を形にしていこうと試行錯誤を続ける Eさんと Fさん。そ

れに対して台湾と日本に暮らすタイヤルの人びとからフィードバックが寄せられる。

デジタルツールは学術研究成果へのアクセスを可能にし、言語の違いや距離の隔たりを超えて助言、感想、疑問、批判と、さまざまな声を集める。それらを拠り所としながらも、『『ホンモノを出す』じゃない方向』にも開かれていく。ただし、それは自由気ままな方向ではなく、得られる情報を可能な限り得ようと努め、寄せてくれるアドバイスの意味を斟酌しながら、自分たちなりの着地点を模索する過程として語られている。それは結果的に、【抜粋 1】で語られた、エリさんの「ここぞという時に出そうと思っていた野望」としての Tmmyan とは別物になりながら、それでも「めっちゃいい」、「立派な創作」という正の評価につながっている。

実際には、フードユニットからは Tmmyan を含め 7 品からなる「タイヤル定食」が各日限定 20 食で提供され事前予約をもって完売となった。イベント主催者のエリさんは「売り切れてて食べるができなかった」そうだが、イベント終了後に「まかない飯」として振る舞われた Tmmyan をスタッフと共に美味しく食した。

3. 2 台湾原住民族音楽と宮古・アイヌ音楽とのコラボレーションライブ

続いて、ライブを構成する経緯についてエリさんの語りを見ていきたい。

宮古島出身の池内真理野さんとアイヌミュージシャンの OKI さんとのコラボレーションで「台湾原住民族・宮古・アイヌ」を前景化しながらつなぐことは、B さんや E さんの紹介によるもので、最初からそのような目的意識をもってライブ企画を立ち上げたわけではなかった。この「ご縁」をどう具体的な形にするかが課題となった。

当初、「私がボーカルで、かつ主催者なのだから、私がアイヌや宮古の歌を歌うことになるのだろうか」と漠然と考えていたという。宮古の音楽については、真理野さんの協力と説明、助言を得て選曲が定まった。残された課題はアイヌ音楽で、OKI さんとはなかなか打ち合わせの時間が取れない。具体的な

アイディアがないまま本番1週間前に開催されたOKIさんのソロライブに足を運んだ。その時のことを振り返った語りが【抜粋3】である。

【抜粋3：OKIさんとの出会い】

意外だったのは、OKIさんは台湾の原住民の友達がいっぱいいいて、マイノリティ音楽どうして交流が結構あったらしいんです。あっち（台湾）のフェスにも呼ばれて。それはマネージャーのGさんからたまたま帰りの電車が一緒になって聞いたことなんだけど日本とか日本以外の国の場合でも「正装をお願いします」と言われることがあって、それはちょっとねっていう話。自分で着ると決めて着るならいいけど、「民族衣装正装をお願いします」って（人から）言われたくない、という話を聞いて、それすごく分かる。あれ？いろいろ前後してきちゃったな。たまたまその日、（OKIさんの）お誕生日だったんです。それで数名で誕生日会みたいなのがあり、「エリは台湾なんだよね、何族？」って聞かれて、日本で話していて「何族？」とは聞かれない。台湾だったらあるんです。「何族？」って。あ、こういう感じ。懐かしい。初めて会ったのになんか懐かしい。それに原住民の歌も知ってる。私がかつてCD屋さんで出会った原住民のアーティスト達と何十年来の友達とか。初めて日本でそういう人に出会ったから、ほっとして。そう思って家にアイヌの本があったなって思って。そう、これはね、台湾の原住民研究をしている中村平さん⁷⁾って方がいるんですけど、文化人類学だけどオートエスノグラフィーか、オートバイオグラフィーをエスノグラフィーの手法として使うというので研究会に「顔を出さない？」って誘われて、そこに石原麻衣さん⁸⁾も出ていて、たまたま共通の知り合いがいて「わー」ってなって。去年だか出版した本で、アイヌの人たちが寄稿して、その本にOKIさんも寄稿していて、そういえば、あったじゃない、あったじゃない、と思って本棚から引っ張り出してきて読んだんです。アイヌの衣装のことも書いて

7) 注3を参照。

8) 注5を参照。

あって、台湾で演奏する時のことも書いてあって「おれ、台湾で演奏する時はアディダスのジャージで行くの。あいつらおれのこと誰だか分かっているからね」⁹⁾ みたいなことが書いてあって、あ、そういう気持ちがあるんだと、またそこで出会い直し、ああああとって、私は心配がなくなったんです。

直接 OKI さんに行ってヒントを得ようとソロライブに行ったが、その日は OKI さんの誕生日会が計画されており、人びとに囲まれ、打ち合わせのような話はできなかった。【抜粋 3】では、エリさん自身も「いろいろ前後してきちゃった」と言っているように、時系列が一部、錯綜する。この日の時間的な経過で追えば、①ソロライブに行く、②終演後「エリは何族？」と聞かれる、③帰り道に G さんから民族衣装について聞き共感する、④帰宅して本を読み確信を得る、となる。この継起順序が錯綜したのには、OKI さんに台湾原住民音楽家との親交があることを前景化しようとしたからと見える。

OKI さんが台湾原住民のミュージシャン達と友達であると知りえたことは、エリさんが「CD 屋さんで出会った」ような音楽的に尊敬するミュージシャン達と親交がある、ということだけを意味するのではない。もちろん、そうした要素もなくはないだろう。しかし、それ以上に、言語や文化の内容は異なっても、情熱と誇りをもって先住民族の音楽活動を続ける者どうしだからこそその相互理解、心の交流、信頼関係がある。そういう人たちとの演奏では、自らの意思によるものだったとしても民族衣装で正装する必要がなく（マジョリティから指図されるなどは論外である）、「アディダスのジャージ」で心配なく舞台上で立てる。その心情への敬意と共感、は、「エリは何族？」といとも自然な体で聞かれたこと、その日の帰り道にマネージャーの G さんから聞いた話という直

9) 該当部を抜粋する。「海外のライブでは必ず正装でステージに立つ。このときばかりは民族を背負って立つ覚悟だ。でも届けるのはおれの音楽だ。いい演奏をすることに全力を注ぐ。そもそもへたくそなので集中しないとイケない。数万人の前で堂々としていた。2019 年の台湾のフェスはアディダス・ジャージだった。へたれてない新品のアディダスだ。原住民のフェスだったしみんなおれのこと知ってるからね。……」(Kano, 2021:19-20)

近の記憶と結びつけられて補強される。かくして、エリさんは当日まで打ち合わせが行われないことについて「心配がなくなった」のである。

この一連の出来事の語りのなかで、エリさんが OKI さんと直接やりとりしたのは、「エリは何族？」の部分だけである。時間にすればほんの一瞬のことである。しかし、それは台湾原住民ならではのコミュニケーションスタイルに馴染んでいるということを示し、台湾原住民のミュージシャンと OKI さんとの親交が表面的なものではないことも示す。

4月10日のライブでは、エリさんはアイヌ音楽を歌うことは予定しなかった。口琴と一緒に演奏することでアイヌとタイヤルのコラボレーションは網羅できるとも考えていた。実際には、エリさんが Festoon で特別に歌いたいと思って歌った高一生¹⁰⁾の曲を聴いた OKI さんが、台湾に行ったときの記憶を蘇らせ、台湾原住民の歌を即興的に歌った。結果的に、台湾原住民のミュージシャンであるエリさんが宮古の歌を歌い、アイヌのミュージシャンである OKI さんが台湾原住民の歌を歌い、台湾・宮古・アイヌ音楽のコラボレーションライブは盛況のうちに幕を閉じた。

4. 考察

これまで、台湾をメインテーマとした文化祭を東京で開催する際に台湾のマイノリティである原住民の文化活動がどのような経緯で持ち込まれたかについて、その一部である料理と音楽を取り上げ、主催者のライフストーリーを中心に見た。異国のマイノリティ文化を持ち込む経緯と過程について、4. 1では二つの事例に対照的な相互作用過程を、4. 2では両事例の接点を考察していく。

4. 1 二事例の相互作用過程

タイヤルの伝統的な家庭料理を提供するまでの相互作用過程については、台

10) 1908年生まれ。ツォウ族で民族名はウォグ・ヤタウユガナ。1954年白色テロに関連した無実の罪を着せられ処刑された。日本統治時代は巡査、教員を勤め、戦後は民族の自治を構想して奔走するかたわら数多くの作曲をした。(高 2013)

湾に暮らす母から改めて情報を得、エリさん自身は媒介者、補佐的な立場に立って日本人の調理担当に伝える過程があった。

はじめのうちは伝統的なタイヤル料理が追求され、エリさんの母の Tmmyan の再現が模索されていたものの、ある段階から E さん、F さんの「妄想のタイヤル料理」、すなわち「ホンモノじゃない方向」への展開が始まった。ただし、それは異民族（この事例では日本人）の自由気ままな創作ではなく、エリさんをはじめとするタイヤルの人びとからの関心や助言、応援を受け止め、彼ら自身も可能な限り情報収集と試作を繰り返し、もらった情報をつなぎあわせ、周囲の承認も得ながら「立派な創作」と評される料理を提供するに至っている。

ことばをどんなに尽くしても、身体化された技能や感覚（この場合は味覚）を伝えるのには限界がある。ましてやそれを経験したことがない人に言語のみで伝えるなど不可能である。それでも、視覚で得られる情報から配分や頃合について助言してくれる人がいた。それらの情報や反応は居住地を問わず Tmmyan を知っているタイヤルの人びとから寄せられる。SNS を介して「相手のスタンプ」という記号を用いたり、人づてでエリさんに届き日本語に翻訳されて届けられる。「妄想のタイヤル料理、Tmmyan（風ロールキャベツ）」は、それらの諸記号をつなぎ合わせてもなお埋まらない、いわば空き地のようなどころに着地した創作物といえよう。

料理の事例とは対照的に、アイヌ音楽と台湾原住民族音楽とのコラボレーションライブについては、ほとんど事前準備（言語化）されることなく行われた過程を見た。エリさんは OKI さんと話し合いや打ち合わせの可能性を探ったが、その機会は得られなかった。それでもいいと「心配がなくなった」のには、アイヌミュージシャンの OKI さんが、台湾原住民族ミュージシャンとの親交があること、彼らの文化（コミュニケーションスタイル）をごく自然に身体化していたこと、マジョリティ社会からの扱われ方に対する違和感に共感できたことなどによる。

【抜粋 3】で語られたことは、マイノリティとマジョリティの関係性において、マジョリティ側の不躰さという歪みが現れる状況への嫌悪感と、それを共

有しているマイノリティどうしの共感という、いわば関係性のマクロ構造である。それが「エリは何族？」という台湾原住民ならではのコミュニケーションスタイルに馴染んでいるということを示す声かけによって、パーソナルつながりとして見出された経緯である。ここには、マジョリティとマイノリティの不均衡な関係性のマクロ構造と、対人間の対等かつ共感的なミクロレベルのやりとりとの連環が見出される。

4. 2 両事例の接点

Tmmyan を提案したのはエリさんであり、それは長年温めてきた「野望」であった。私的な生活文化を他者に広く「伝えたい」という思いに至ったのには、本業としている音楽の領域で、台湾原住民族音楽を人前で歌うことに納得がいったことと連動していたことが語られた。ここにマイノリティ文化の公的な共有において、一方（この事例では音楽）が、他方（食）を誘引したことを確認しておきたい。このように、料理と音楽を広く紹介することの間には重要な関係があるが、これは当該イベント内のかかわりとはいえない。会場配置の面でも、Tmmyan の提供は会場の1階で、ライブは2階で行われ、2つの文化実践は物理的にも隔たっていた。そこで、両事例の接点をエリさんの語りから検討していきたい。

台湾文化祭の準備から当日の運営、終了後まで、順を追って振り返ったライフストーリー・インタビューの終盤、「Festoonとは一体なんだったのか」といういささか大きな問いかけに、エリさんは以下のように答えた。

【抜粋4：Festoonの意義】

一番これ、Tmmyan が反応が大きかったかな。画像がSNSに上がったら「あれを作ったの誰？」とか、レストランの投稿だと思ったみたいで「そのレストランはどこにありますか？」と英語で質問がきたとか。そう、今回のイベント、私がやっぱりよかったなって思ったのは、やっぱりこれを出したことによってタイヤル族がすごく「いいね」とか。「次やるなら私が

Tmmyan 作るから言って」って東京の近辺に住んでいるタイヤル族の人が言うとか。知ってはいるけど直接連絡するほどではないという人からママに連絡が入って、「次に作るときは私が全部やってあげる」って言ってる人がいるよ」とか。

エリさんの友人、EさんとFさんが試行錯誤を重ねる過程に、各地に暮らすタイヤル族の人から反応があった。イプイさんが日本に暮らしていたとき、タイヤル人のネットワークを形成することはいろいろな事情で困難だったようだ。今は当時とは社会情勢もマジョリティ社会の意識も異なる。多文化共生社会の実現には、まだまだ課題が残されているとはいえ、今だから原住民族文化を公に紹介することに前向きにもなれ、関与・貢献したいと思うタイヤルの人がいることが確認された。

さらに、エリさんは自身のこれからの活動の方向性にもつなげて以下のように語った。

【抜粋5：マイノリティの歌手として真価を発揮する方向性】

E：これ、たっまたま、たまたま宮古と北海道がたまたま揃って本当に別にそういうつもりでやっていないけど、やってみたらなんかいいじゃんみたいなの、その適当な感じ。あ、そうですね、適当でありたい。ずっと、ずーっと、ずーっと適当でありたい。

*：ずーっと？

E：ずーっと適当でありたい。なんか、そこはね、失いたくないって思っていて、やっぱりちょっとマジになりすぎちゃうと、たぶんそれは私は違うんだなって思っていて。本当に真面目に考えたら私のアイデンティティ崩壊ってことになるから、この適当みたいなところが、たぶんそこで自分が一番真価を発揮するんだと忘れないように。私が原住民の何に救われたかって適当なの。どっちかと言うと苦しい人が「これぐらいでいいんだ」って思える。ありもので。ありものでこれぐらいやれるってい

うのがすごい。今持っているもので出来るじゃん。……でもその適当さも OKI さんと真理野ちゃんがいてくれたから私は救われるというのがあって、マジョリティが適当な中にいたら私はきっと発狂してしまう。真理野ちゃんもきっとそういう中の違和感を感じたことがあるはずで、そういう色々な複雑な気持ち、マイノリティにはきっとあって。まったく無視されてつらいっていうのもあると思うけど、なんて言えばいいんだろう？ここ？みたいなポイントにマニアックになられたり、適当な説明をさも「そうです」みたいに言われるのも。なんだろう。マイノリティが適当であるのはいいんだけど、マジョリティに適当な説明をされたら「なんだ？」みたいな、私の中に怒りへの引き金がある。一方で怒れる先住民っていう像もあるじゃないですか。「土地を返せ」とか。ネイティブアメリカンもそうですけど、あれをやればやるほど届かないみたいな、声を大きくすればするほど周りが（耳をふさいで）「ううう」ってなる。でも言わないといけないことだし。難しい。それはずっと考えることになるんだろうなと思う。

*：自分で納得できるところを探す？

E：そうですね、多少嫌な思いすることはあるということも織り込み済みで間口を広く、広く、いろいろ用意してあるというところ、できたらいいなと思います。

エリさんが「適当でありたい」と強調して言うのには、突き詰めがちな自分を自覚してのことだろう。今回の文化祭を主に担った人びとを表1に示したが、それはごく一部で、筆者も含めて一日だけ手伝いに来た人、間接的に関与した人、さらにお客さんも文化祭参加者なのだから2日間で膨大な数の人が関与している。それでも、台湾のルーツをもつ人は筆者が2日間の参加を通して知り合い得た人びとのなかでIさんだけであった。そのIさんも「私は台湾出身だけどエリと知り合うまで台湾原住民について真剣に考えたことはなかった」と話してくれた。

2日間、都心の空間に突如出現する台湾の文化空間。そこには、たまたま通りかかって覗きに來る人も、強者の台湾通も集う。ある少数民族として生まれ落ち、その文化が培われた土地を離れても大切にしようとしている人にとってピンとこないような部分をとうとうと説明されるのには困惑する。とはいえ、適当にあしらわれるのは耐えられない。では自分で説明が十全にできるかと言えば、それも難しい。広漠な原住民族文化のすべてをその歴史考証も踏まえてすることなど誰にも不可能なことである。仮にエリさんがそのような方向を目指したとしても、きっと「気難しげな原住民の人」となって、さまざまな背景をもつ人が集えるような空間を作り出すことは難しくなってしまうだろう。そう私たちは話した。

あるいは、一参加者であればその場で議論することも立ち去ることもできる。しかし主催者であるエリさんはイベント全体を成立させなくてはならない。先住民やマイノリティについて何ひとつ知らない人から、マニャックさが突出している人までに広がる人びととの間断ないやりとりに囲まれ、笑ってやりすぎす虚無感、しまいこんだ怒りがないとはいえない。若い頃には、しまいこみきれずに噴出させてしまった怒りもある。間違いなく、そういう局面を積み重ね、くぐり抜けてステージに立ち続けている OKI さんと真理野さんがいるから乗り越えられる。それが分かるのは、膝を突き合わせて対話を重ねたとか、愚痴をこぼしあったからではない。絶妙な場面で発する、お互いの何気ないひと言から分かるのである。

その一例が【抜粋3】の「エリは何族？」という OKI さんの問いかけなのだろう。この声かけは、まるで、ことばを尽くし、打ち合わせを重ねるよりも確信に満ちた信頼につながったかのように見える。むしろ、何気ないひと言だったからこそ真正なものに捉えられたとさえ言えそうである。「本質は細部に宿る」というように、マイノリティであるがゆえの感受性の交感が行われたのかもしれない。このように見ていくと、台湾原住民・宮古・アイヌのコラボレーションライブは Festoon におけるすべての文化実践の背骨（バックボーン）として全体を支えていたのだといえよう。

5. おわりに

本稿では、東京の都心の小さなイベントスペースで開催された台湾をメインテーマとした文化祭において、台湾原住民に関連する文化活動がどのような経緯で持ち込まれ、そこにどのような人びとの関係性があつたのかについて、参与観察を実施した上で、主催者のエリ・リャオさんへのライフストーリー・インタビューの語りを主軸に分析し、考察を行った。タイヤル家庭料理 Tmmyan の提供には日本人が携わり、エリさんを介して台湾に暮らすエリさんの母や親戚の叔母さん達とのやりとりが頻繁に行われ、またインターネットを介して不特定多数のタイヤルの人びととのやりとりがあつた。さらに、東京近郊に暮らすタイヤル族からは将来的に係わりたいという申し出もあつた。ここでは現在の居住地を問わず教えるタイヤル人と教わる日本人の関係が生み出され、たくさんのやりとりが行われた。その相互作用のなかで「ホンモノではない方向」へも開かれ、「妄想のタイヤル料理」が形となつた。

タイヤルルーツのエリさん、アイヌルーツの OKI さん、宮古ルーツの真理野さんによるコラボレーションライブは、事前のやりとりはほとんど行われなかったが、ふとしたひと言によって同じマイノリティ、先住民のミュージシャンとして信頼関係が瞬時に生まれ、即興的なコラボレーションライブが実現した。エリさんの語り【抜粋 5】で、この音楽ライブが文化祭のバックボーンとして主催者のエリさんを支えていたことを見た。翻ると、音楽がバックボーンとしてあるからこそ、それに関連付けた文化活動を持ち込みやすくさせたのかもしれない。

2つの事例を詳細に見て、また調査者として相互作用の場に身を置いてみて感知されることは、エリさんの他者との向き合い方の柔軟性である。エリさんは強い自己主張をせず、相手に押しつけることなく提案し、相手の様子をよく見て、相手の提案に「いいじゃん、やってみよう」と背中を押す。そういう自分自身をエリさんは「適当」と表現する。しかし、結果的にそれが Eさんと Fさんによる「妄想のタイヤル料理」を生み、アイヌミュージシャンの OKIさんは回想を促され台湾原住民の歌を歌つた。エリさんは自らは媒介者となつ

て人びとの記憶に格納されてある追憶の台湾原住民の像を復刻させたり、はたまたまだ見ぬ台湾原住民への「妄想」を創造に誘う。ここに越境する文化活動のひとつのありようが見える。

Festoon は 2022 年秋に Vol.2 を予定している。どのような文化活動がどのように持ち込まれ、誰も見たことがない形になって着地するのか。引き続き見ていきたい。

謝辞：台湾文化祭 Festoon での参与観察から終了後のインタビューまで、一連の調査活動を快くゆるしてくださいましたエリ・リャオさんをはじめ、Festoon に係わっていらっしゃったすべての方に心から感謝申し上げます。また、Festoon に共に参加し、草稿の段階で貴重なアドバイスをくださった編集者の Y.M. さんにも心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- Atkinson, R. G. (1998) *The Life Story Interview*. SAGE Publications.
- Howard, K. (2020). Equity in music education: Cultural appropriation versus cultural appreciation: Understanding the Difference. *Music Educators Journal*. 106(3): 68-70.
- 石原真衣(編著) (2022). 『記号化される先住民／女性／子ども』青土社
- Kano, O. (2021). 「一五〇年後」石原真衣(編著)『アイヌからみた北海道一五〇年』(pp.16-24). 北海道大学出版会
- 高英傑 (アバイ・ヤタウユガナ) (2013). 「随筆 ケユバナの思い出：私の父、高一生」(下村作二郎訳) 下村作二郎・孫大川・林清財・笠原政治(編)『台湾原住民族の音楽と文化』(pp.247-282) 草風館
- Kondo, D. (1997). *About Face: Performing Race in Fashion and Theater*. Routledge.
- Koo, S. (2021). *The Sound of the Border: Music and Identity of Korean Minority in*

China. University of Hawai'i Press.

朴君愛(2014)「在日コリアン女性への差別とエンパワメント：ミドル・エイジの当事者の語りを通して見えたもの」『女性学研究』21:1-31

Rogers, A. (2015). *Performing Asian Transnationalisms: Theatre, Identity and the Geographies of Performance*. Routledge.

桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門』せりか書房

Saruhashi, J. (2018). Personal empowerment through language management. In L. Fairbrother, J. Nekvapil & M. Sloboda (Eds.), *Language Management Approach: Special Focus on Research Methodology*, (pp. 231-258) Peter Lang.

猿橋順子(2021). 『国フェスの社会言語学：多言語公共空間の談話と相互作用』三元社

下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治(編)(2013). 『台湾原住民族の音楽と文化』草風館

中村平(2018). 『植民暴力の記憶と日本人：台湾高地先住民と脱植民の運動』大阪大学出版会

Young, J. O. (2008). *Cultural Appropriation and the Arts*. Blackwell.